

神は愛なり光なり

《 神秘と救いの世界 — 霊界物語 》

霊界物語 霊主体従

子の巻（第一巻）

第7章 ～ 第12章

第七章 《幽庁の審判》 [七]

現代語訳

31 ここに大王のお許をえて、私は産土神、芙蓉仙人とともに審判廷の傍聴を許された。仰ぎ見るばかりの高座には大王がお出ましになり、二三尺《60～90cm》下の席には、顔つきのもの凄いな冥官達が並んでいる。最も下の審判廷には多数の者が地面に跪いて畏まっている。見わたすと私につづいて大蛇の川を渡ってきた旅人も、すでに多数の者の中に混じって審判の言い渡しを待っている。日本人ばかりかと思へば、中国人、朝鮮人、西洋人なども沢山にいるのを見た。私はある川柳に、

①『唐人を入り込みにせぬ地獄の絵』

というのが、それを思いだして、この光景を不思議に思い、仙人に耳打ちしてその理由を尋ねた。何と思っただか、仙人は頭を左右に振ったきり、一言も答えてくれない。私も強て尋ねることを控えた。

ふと大王の顔を見ると、アツと驚いて倒れそうになった。そこを産土の神と仙人とが32左右から支えて下さった。もしこのとき二柱の御介抱がなかったら、私は気絶したかも知れない。今まで穏やかで上品な、しかも犯すことの出来ない威厳を備え、美しい無限の笑をたたえておられる大王のお顔つきは、たちまち真紅と変り、眼は非常に大きく、口は耳のあたりまで引裂け、口から炎のような舌を吐き出しておられた。冥官もまた同じような凄まじい顔つきで、顔をあげて見ることが出来ない、審判廷はにわかに物凄さを増してきた。

大王は中段に座っている冥官の一人を手招きなされると、冥官はかしこまって大王の前に出た。大王は冥官に一卷の帳簿を与えられると、冥官はうやうやしく押しいただき元の座に帰り、一々罪人の姓名を呼んで判決文を朗読するのである。番卒は順次に呼ばれる罪人を引きたてて幽廷を退く。現界の裁判の様に審理前手続きだの、控訴だの、最高裁だのというような設備もなければ、弁護人もなく、単に判決の言い渡しのみで、きわめて簡単である。私は仙人を顧みて、

『何故、冥界の審判はこんなに簡単なのですか』

と尋ねた。仙人は答えて、

33 ②『人間世界の裁判は常に誤判がある。人間は形の見えないものは総て駄目である。だから幾度も慎重に審査しなくてはならないが、冥界の審判は三世洞察自在（過去、現在、未来を思いのままに知りうる）の神の審判だから、どんなに簡単であってもわずかな誤りもない。また罪の軽重大小は、大蛇川を渡るとき着衣の変色で明らかに判断できるので、ふたたび審判する必要は全くないのです』

と教へられた。一順言い渡しがすむと、大王はしづかに座を立て、元の御居間に帰られた。私もまた再び大王の御前に招かれ、恐る恐る顔を上げると、此は一体どうしたことか、今までの恐ろしい形相は跡形もなく変わっておられて、また元の温和で慈愛に富んだ、美しい御顔に返っておられた。③ 神諭に、

『因縁ありて、昔から鬼神と言はれた、良の金神のそのままの御魂であるから、改心のできた、誠の人民が前へ参りたら、結構な、いうに言はれぬ、優しき神であれども、ちよっとでも、心に身慾がありたり、慢神いたしたり、思惑がありたり、神に敵対心のある人民が、傍へ出て参りたら、すぐに相好は変りて、鬼か、大蛇のやうになる恐れ身魂であるぞよ』（定められた運命によって、昔から鬼神と言われた、良の金神のそのままの精神であるから、心に悔い改めが出来た、誠の人が前に来たら、素晴らしく、言い表せないほど優しい神であるが、ちよっとでも、心に自己本位な欲があったり、傲慢になったり、何かしてやろうとする思いがあったり、神に逆らう人が側にきたら、すぐに容貌が変わる鬼や悪魔のように見える怖い身魂であるぞ）

34 と示されているのを初めて拝読したときは、どうしても、今回の冥界に来て大王に直面したときの光景を、思い出さずにはおられなかった。また教祖にはじめてお目に掛ったときに、その優美で温和、かつ慈愛に富める御顔を見て、大王の御顔を思い出さずにはおられなかった。

大王は座より立って私の手を堅く握りながら、両眼に涙をたたへて、

『三葉殿（出口聖師）御苦勞であるけれど、これから冥界（死後の世界）の修業の実行を始めなさい。④ 顕幽

（現界と幽界）両方の救世主であるものは、救世主の實踐の學問を習っておかなければならない。湯など差し上げたいは山々だけれど、湯も水も修行中は禁制である。さあ一時も早く実習にかかりなさい』

と御声さえも湿りがちに成られた。ここで産土の神は大王に、

『何分よろしく御願ひ申し上げます』

とおっしゃったまま、後もみず再び高い雲に乗って、何処かへ帰ってゆかれた。

仙人もまた大王に黙礼して、私には何も言わず早々に退座された。跡に取りのこされた私は少し狼狽の様子であった。大王の御顔は、俄に一変してその眼は鏡のように光り輝き、35 口は耳まで裂け、ふたたび顔を向けることができぬほどの恐ろしさ。そこへ先ほどの冥官が番卒を引連れ来て、たちまち私の白衣を脱がせ、灰色の衣服に着替させ、第一の門から突き出してしまった。

突き出されて辺りを見れば、一筋の汚く細い道を枯草が塞ぎ、その枯草が皆氷の針のやうになっている。後へも帰れず、進むこともできず、横へゆこうと思へば、深い広い溝が掘ってあり、その溝の中には、恐ろしい厭らしい虫が充満している。私は進みかね、どうしようかと考えめぐねていると、空に真黒な怪しい雲が現われ、雲の間から恐ろしい鬼のようなものが覗みつけている。後からは恐い顔した柿色の法被を着た冥卒が、先端の十字形をした鋭利な槍をもって突き刺さうとする。止むをえず逃げるやうにして進んでゆく。

四、五キロメートルほど行った処に、橋のない深い広い川がある。何気なく覗いてみると、誰とも見分けがつかないが、汚い血とも膿ともわからない水に落ちて、身体中に蛭が集って隙間が無いほど血を吸っている。旅人は苦そうな悲しそうな声で怒鳴っている。私も 36 この溝を越えなければならぬが、翼のない身は如何にして此の広い深い溝が飛び越えられるだろうか。後からは赤い顔した番卒が、鬼の顔つきに変わって鋭利な槍をもって突刺そうとして追いかけてくる。行くことも退くことも出来なくなって、泣くにも泣けず悶え苦しんでいた。急に思い出したのが、先ほど産土の神からもらった一卷の書である。懐より取出し押しいただき開いて見ると、畏くも『⑤ 天照大神、惟神靈幸倍坐世』と書かれた文字、墨の色ともに、美しく鮮かに書いてある。私は思わず知らず『天照大神、惟神靈幸倍坐世』と唱えたとたんに、身体は溝の向うに渡っていた。

番卒はスゴスゴと元の道へ帰ってゆく。まづ、ひと安心して歩を進めると、急に寒気がひどくなり、手足が凍えてどうすることも出来ない。こんなところへ現われたのは黄金色の光であった。ハツと思つて私が驚いて見ている間に、光の玉が足下七、八十センチの所に、突然、降ってきた。

閻魔大王のお顔つきは対面する魂の善悪によって変わり、善良な魂に対しては温和で慈愛に富んだ、実に美しい御顔であるが、悪の魂に対してはたちまち真紅と変り、眼は非常に大きく、口は耳のあたりまで引裂け、口から炎のような舌を吐き出しておられる顔に変わる（地獄絵図そのまま）。そして審判は実に簡単で過去、現在、未来を思いのままに知りうる神の審判なので少しの間違ひもなく、即決である。

聖師はいよいよ幽界の修行に出られ、先ず地獄と思われる場所に身を置くことになられた。そこで産土の神より授かった一卷の巻物に書かれた『天照大神、惟神靈幸倍坐世』の神号と神文によって救われます。

## 用語の解説

### ① 川柳『唐人を入り込みにせぬ…』

句の意味は「お寺などで見る地獄極楽の絵には外国人が描かれて居ないのはなぜか」 唐人は中国人または外国人。 {「俳風柳 多留」(1765年刊)の初編にある川柳です。仏教の地獄の絵には、地獄に落ちて苦しんでいるのは日本人ばかりで外国人がいないのはどういうことかという、うがちの句である。別に地獄は日本人の専売特許ではない、江戸時代は鎖国政策で一般市民にはせいぜいが中国人が外国人であったからそう言ったのでは

ないだろうか。

② 『人間界の裁判は常に誤判がある。人間は形の見へぬものには一切駄目である。ゆゑに幾度も慎重に審査せなくてはならぬが、冥界の審判は三世洞察自在の神の審判なれば、何ほど簡単であつても毫末も過誤はない。また罪の軽重大小は、大蛇川を渡るとき着衣の変色によりて明白に判ずるをもつて、ふたたび審判の必要は絶無なり』

閻魔の庁での審判は過去、現在、未来を思いのままに知りうる（三世洞察自在の）神の審判であり、三途の川を渡った時すでに罪の軽重は付いているとあります。それはリトマス試験紙のようなもので生前の己が心の状態を必然的に衣服に現れるのでしょう。正に誤魔化しの出来ない状態です。

また、閻魔大王はその魂の罪の軽重により顔つきが変わるようだ。天国に登るべき魂が来ると何とも慈愛に満ちたお顔になり、地獄に落ちる魂が来ると目は鏡の如く、口は耳まで裂けるらしい。また、第六章の用語の解説①「八衢」で書いたように死後、精霊は八衢と言うところに必ず集まってくる。そして、そこに至る道筋の様子が書かれているが罪の軽重により通る道が違う、それは生前の心の状態がここでも反映されるようです。

③ 『神諭に』

「定められた運命によって、昔から鬼神と言われた、良の金神のそのままの精神であるから、心に悔い改めが出来た誠の人が前に来たら、素晴らしく言い表せないほど優しい神であるが、ちょっとでも、心に自己本位な欲があつたり傲慢ごうまんになったり、何かしてやろうとする思いがあつたり、神に逆らう人が側にきたらすぐに容貌が変わる鬼や悪魔のように見える怖い身魂である」とある。良の金神は御引退後、幽界に入られ閻魔大王となられたのであるがこれを見ても判るように、とても厳しい精神の神様です。

④ 『顕幽両界のメシヤたるものは、メシヤの実学を習つておかねばならぬ』

ここでも聖師が「顕」即ち現れた世界、我々が住む現実世界（現界）と、「幽」即ち隠れた世界の幽界両界のメシア（救世主）であると言っている。聖師（メシア）ほどの人物も現界に生まれてくれば現界の法則に従わなければならない。したがって現界、幽界の修行が必要なのです。

同じ事が天照大神様でも現されています。第16巻第16章「神定の地」に

『吾は天照皇大神あまてらすすめおほかみなるぞ、其昔此御山みやまに現はれ、産釜うぶがま、産盥うぶだらひと俗に称する天の眞名井あめまなゐに御禊みそぎして、神格を作り上げたる我旧蹟なんぢらよるしなり、汝等宜敷なむく此処こゝに宮殿みやを造り、我御霊みたまを祀まつれ、』とあります。

初めに天照皇大神と本守護神とも云うべき御本霊の神格を述べられており、次に顕界（元伊勢の地）にお生まれになって、そこで産湯をお使いになり、神格を作り上げたとあります。神といえども顕界に現れられる（幽体を持たれる）時は、我々と同様、物質世界の法則に順って成長されるのです。

⑤ 天照大神

天照大神はご存じ伊勢神宮にお祭りしてある神様です。一般には「天照大神」と書いて「あまてらすおほみかみ」と読みますが、大本では「あまてらすおほかみ」と読み、「あまてらすおほみかみ」は「天照大御神」と書きま  
す。他に「天照皇大神すめ」と「天照皇大御神すめおほみかみ」があり、後ほど神格が高くなります。詳しくは別稿「天照大神とは」を参照されたい。

第八章 《女神の出現》 〔八〕

現代語訳

37 不思議でしょうがなく、私は金色にきらめき輝く珍しい玉の明るい光を拝見して、何となく力強く感じられ、眺めていた。次第々々に玉は大きくなるとともに、水晶のように澄みきり、たちまち美しい女神のお姿に変わった。①紫摩黄金の肌で、その上透き通って透明でいらっしやいます、白の衣服と、下は赤く鮮やかな緋色の袴をはいておられる、愛情あふれるばかりの女神であった。女神は、私の手を取り笑を含んで、

『わたしは便所の神である。貴方にこれを上げましょう』  
と言ってすぐに御懐中より、二四センチほどの②比礼を私の左手に握らせて、再会を約束して、また元の様に金色の玉となって空に舞い上り、一瞬のうちに、幾重にも重なりあった雲の奥深く天上に帰えられた。

その当時は、どのような神様か、また私にたいしてなぜこの様な珍しい宝を、こんな寂しい場所に降ってきて授けられたのか疑問であった。しかし③参綾後はじめて疑いが解けた。

38 教祖の御話に、

『④金勝要神は、全身黄金色であって、大便所に永年のあいだ落され、苦勞艱難の修行を積んだ大地の金神様である。その修行が済んで、今度は世に出て、結構な御用を遊ばすやうになったのであるから、人間は便所の掃除から、歓んでするような精神にならなければ、誠の神の御用はできぬ。それに今の人民さん（人々）は、高い処へ上って、偉い役をしたがるが、神の御用をするものは、汚い所を、美しくするのを楽しんでするものでないと、三千世界の大洗濯、大掃除の御用は、とうてい出来ません』

との御言葉を承はり、かつ神諭の何処にでも書かれているのを見て、不思議な感じを受け、神界の奥深く容易にはかり知れず、味わい深い御経緯に驚いた。

女神に別れ、ただ一人、太陽も月も星も見えぬ山野を深く進んでゆく。

山深く分け入る吾は日も月も

星さへも見ぬ狼の声

39 冷たい道のそばに沼とも、池ともわからない汚い水溜りがあって、その水に美しい三十歳くらいの青年が落ちていて、様々な虫に集られ、顔はそのままであるが首から下は全部蚯蚓にたかられてしまい、見るまに顔まですっかり数万の蛆虫になってしまった。私は思はず、「天照大神、産土神、惟神靈幸倍坐世」と二回ほど繰返した。不思議にも元の美しい青年になって、その水溜りから這い上り、嬉しそうな顔をして礼を述べた。その青年の語るところによると、

『童女を犯した祖先の罪によって、自分もまた悪い後継ぎとなり童女を犯しました。その罪によって、こうゆう苦しみを受けることになったのですが、今、あなたの⑤神文を聞いて忽ちこの通り助かりました』  
といて感謝する。

それから私は、天照大神の⑥御神号を一心不乱に唱へつつ前進した。⑦月もなく、鳥もなく、霜はそこら一面に降り、寒さ厳しく膚を切るようで、手も足も棒のやうになり息も凍ろうとする時、またもや「天照大御神、惟神靈幸倍坐世」と声に出して唱えた。不思議にも④言霊の持つ神力は著しく、たちまち全身に暖かみを覚え、手も足も湯に入ったようになった。

ア、地獄で神とは、このことであると、感謝の涙は滝のように流れるばかりであった。四、五キロメートルも探しながら行くと、そこに一つの断崖に衝き当る。止むをえず、引き返そうとすれが鋭利な槍の尖が、十六、七センチの近くまできている。この上は神にお任せしようと決意して、氷に足をすべらせながら右手を見ると、深い谷川があって激しい流れはしぶきを飛ばし、川音の物すごい中に、名もわからず見た事もない恐ろしい動物が、川へ落ちた旅人を口にくわえて、谷川の流れに浮いたり、沈んだり、旅人は「助けて助けて」と、そればかり叫んでいる。私は、ふたたび神号を奉唱すると、旅人をくわえていた怪物の姿は沫と消えてしまった。

助かった旅人の名は舟木という。彼は喜んで私の後に跟いてきた。一人の道連れを得て、幾分か心がしつかり

してきた。危<sup>あやう</sup>い断崖を辛うじて五、六キロメートルばかり進むと、道が無くなった。薄暗い道を行く二人は、ここに立ち止まって思案にくれていた。そうすると何処ともなく大声で、

『ソレ彼ら二人を、逃がすな』

41 と呼ぶ。にはかに騒々しい物音がしきりに聞えて来た、口の巨大な怪物が幾百ともなく、二人の方へ向って襲いくる様子である。二人は進むことも、後へ戻ることも、どうすることもできず、どうしようかとうろたえた様子であった。どれほど神号を唱えても、少しも退却せずますます迫ってくる。今まで怪物と思っていたのが、不思議にもその顔だけは人間になってしまった。その中で親分らしい魔物は、たちまち長剣を揮<sup>ふる</sup>って兩人に近づいて来た、今まさに斬り殺されようとする瞬間、白衣を着た金色の膚の女神が、ふたたびその場に光とともに現れた。そして、「比礼をお振りなさい」と言って姿は忽<sup>たちまち</sup>ち消えてしまった。懐より神器の比礼を出すはず、上下左右に禱<sup>はら</sup>った。怪物は次第に遠へ退く。あゝ嬉しいと思うまもなく、たちまち大蛇が現われ、大きな口を開いて兩人を呑んでしまった。兩人は大蛇の腹の中を探り探り進んで行く。今まで寒さに困っていた肉体は、どこともなく、暖い湯に入ったような心持であった。轟きわたる音響とともにどのくらい距離があるのかもわからず、深く底のわからぬ所へ落ちて行くのであった。

ふと気がつくとも幾千丈ともわからない、高い滝の下に兩人は身を横たえていた。私の周囲には氷の柱が、42 幾万本ともわからぬほど立っている。兩人は、この高い滝から、地底へ急に真っ直ぐ落ちたことがわかった。ちょっとでも身動きすれば、⑧冷<sup>さ</sup>かった氷の剣で身体を破る。起きるにも起きられず、一緒に来た舟木を見ると、魚を串に刺したように、長く鋭い氷の剣に胴のあたりを貫かれ、非常に苦しんでいる。私は満身の力をこめて、「アマテラスオホミカミサマ」と、一言づつ切れ切れに、ようやく声を出して申し上げた。神徳はたちまち現われ、私も舟木も身体が自由になった。今までの瀑布は、どこへともなく、消えて無くなり、ただ広く遙かな雪の原野となっていた。

雪の中に、幾百人とも分らぬほど人間の手や足や頭の一部が出ている。私の頭の上から、急に山岳も崩れるほどの響がして、雪の塊<sup>かたまり</sup>が落下し私の全身を埋めてしまう。急いで比礼を振ろうとしたが、容易に手がいうことをきかない。ちょうど鉄でこしらえた手のやうになった。一生懸命に「惟神靈幸倍坐世」をようやく一言づつ唱えた。幸に私の身体は自由が利くようになった。四<sup>あたり</sup>辺を見れば、舟木の全身が、また雪に埋められ、頭髮だけが現われている。その上を比礼で二三回左右と振りまわすと、43 舟木は苦しそうな顔をして、雪の中から全身をあらわした。天の一方より、またまた金色の光が現われて二人の身のまわりを照した。原野の雪は、見渡すかぎり、一度にパット消えて、短い雑草の原と変った。

多くの人々は満面に笑をたたえて私の前にひれ伏し、救い主の出現と一斉に感謝の気持ちを表し、今後は救い主とともに、三千世界の神業に参加奉仕しようと希望する人々も沢山あった。その中には実業家もあれば、教育家もあり、医者や、学者も、沢山に混っていた。

以上は、水地獄の中で最初の処であった。第二段、第三段となると、こんな軽々しい苦痛ではなかったのである。私は、今この時のことを思いだすと、恐ろしさにおののき震えて鳥肌が立つ思いである。

聖師は大地の金神である金勝金埜神に遭われ比礼を頂戴します。金勝要神は<sup>かおや</sup>大便所の神とあり、大本の信徒は便所の掃除を嫌がらずに進んで出来るような謙虚な身魂でないと今度の御神業には間に合わぬようです。いつも頭を擡<sup>もた</sup>げよう擡<sup>もた</sup>げようとし、自分こそはと云うような身魂では間にあわない。言い換えればバレーボールなどで、自分の守備範囲をキッチリと守るのはもちろんであるが、人様の範囲にまで踏み込んで積極的にするのはなく、一步下がって、確実にフォローの出来る人になりたいものです。

聖師が救世主であることがよくわかります。原野には救われた多くの人が姿を見せ、「三千世界の神業に参加奉仕しようと希望する人々も沢山あった」とあります。実業家、教育家、医者、学者のように人を導く者は特に注意をしないと地獄に落ち行くことになるようです。

用語解説

① 紫摩黄金

紫みがかった純粋な黄金。紫磨金と同じ。閻浮檀金（閻浮樹の大森林を流れる河に産するという砂金。最も高貴な金とされる）。

② 比礼

小さい布帛（ぬのときぬ）。災いや穢れを祓う際に用いる幣。

③ 参綾

綾部（現 京都府綾部市）

④ 金勝要神 とは

本文の開祖様のお話がよく金勝要神様のことを物語っています。紫摩黄金の肌は紫色をおびた黄金色の肌で、自ら便所の神と名乗っておられます。それは「便所に永年のあいだ落され、苦勞艱難の修行を積んだ大地の金神様である」とあります。物語第3巻第44章「可賀天下」で金勝要神の四魂の神である高照姫命、真澄姫、言霊姫、竜世姫は国祖の神勅を無視して天則違反を犯したため聖地を追放されエデンの園に謹慎します。第45章では

これについても慎むべきは、自我心と驕慢心なり。神諭の各所に、  
『金勝要之神もあまり自我心が強かつたゆゑに、狭い処へ押込められなかつたぞよ』

とあるも、この消息を漏らされたるなり。

しかるに金勝要の神は、一旦大地神界の根神とまでなりたまひしに、自我心の頑強なりしたため、エデンの園に押し込められ、なおも自我を頑強に張りしたため、つひには地底の醜めき穢なき国に墜落し、三千年の辛苦をなめたまふに至りしなり。

と書かれています。そして国常立尊が御退隠になられるとき御一緒に根底の国に赴き便所に落ちて修行をされます。しかしのこ修行とは地獄に落ちた靈魂を救済するための修行です。

発端の解説③で述べたように宇宙は靈力体の三大元からなります。大地もまた靈力体から成り靈魂は金勝要大神で二代教主（すみ）。靈力は国常立命で開祖（なを）、靈体は素盞鳴命で聖師（王仁三郎）となります。

植村花菜の楽曲「トイレの神様」に出てくるおばあちゃんから聞いた女神様はこの金勝金埜神様ではないでしょうか。とても綺麗な神様で、また縁結びの神様でもあります。日本の神話に出てくる須世理毘売命（スサノオの娘で、大国主の正妻。『古事記』では須勢理毘売命・須世理毘売命と表記）がそれです。聖師によれば叶えたい縁があればこの神様にお願ひすれば必ず叶えてもらえるそうです。

大本唱歌集「祝婚」より 嫁ぎ行う今日の日を 天津空より縁をば 与えんとして  
須世理の姫は くだらせ給う 祝たまう

第六卷第五篇 一靈四魂 第二五章 金勝要大神

神名	日本(胞衣)		世界
真澄姫神	愛媛・一名竜宮島	四国	濠洲大陸(オーストラリア)
純世姫神	筑紫の島	九州	アフリカ大陸
言霊姫神	蝦夷の島	北海道	北アメリカ大陸
竜世姫神	高砂の島	台湾島	南アメリカ大陸
高照姫神	あしはら みづほのくに 葦原の瑞穂国	大和(本州)	おうあ 欧亜の大陸(ユーラシア)

「茲に五柱の女神は、地球の中軸なる火球の世界に到り給ひ、野立彦神、野立姫神の命を奉じ、浚く地中の地汲、

地<sup>ちせい</sup>星の世界を遍歴し、再び天教山に登り来つて、大海原の守り神とならせ給ひける。」  
以上からも金勝要神が「大地の金神」と言われることが判ります。

⑤ 神文、⑥ 神号

神文は神に誓約する文。神の名によってする誓約書。「惟神靈幸倍坐世」

神号 《祝詞奏上の後に唱える神名。神の称号。 神祇の別名として加える名号。皇大神・大神・大御神・明神・大明神・天神・地祇・菩薩・権現・天王・若宮・新宮・今宮の類。 例：天照大御神

⑦ 月もなく、鳥もなく

ここの表現は解釈が難しいところで、意味がよく分かりません。

「月もなく」だから夜でしょう。「鳥もなく」は鳥が居たとしても黒くて見えない、真の闇を現しているのでしょうか。また、地獄絵図のなかに「うるさい鳥」と云うのが出てきます。人の死が近づくと鳥が鳴くと言います。死が近づいているので早く念仏を唱え死を迎える準備をしろと鳴くようです。その鳥が居ないと言っているのか、鳴かないと言っているのか。

⑧ 「冷きった氷の剣で身体を破る」

氷の剣は仏教の針山地獄であろうか、舟木のように高いところから落とされて身体を氷の針に刺されて苦しむ地獄絵図があります。

第九章 《雑草の原野》 [九]

現代語訳

44 雑草の原野の状況は、実に殺風景であった。私は、いつしか又一人になっていた。頭の上からザラザラと怪しい音がする。何気なく仰向くとたんに両眼に焼砂のやうなものが飛び込み、眼を開くこともできず、第一に眼の球が焼けるやうな痛さを感じるとともに辺りが真っ暗になったと思うと、何物ともわからず私の左右の手を抜けるほどに曳くものがある。また両脚を左右に引き裂こうとするなんとも言い表すことのできぬ苦しさである。頭上からは冷たい冷たい氷の刃で梨の実を割るようにざっくり二つに割られる。百雷の一時に轟くやうな音がして、地上は波のやうに上下左右に激しく動く。怪しい、いやらしい、悲しい声が聞える。私は一生懸命になって、例の「アマテラスオホミカミ」を、切れぎれにやっと神号を唱えたとたんに、天地が開けたやうな気持がして目の痛もなおり、不思議にも私は ①女神の姿に変わっていた。

舟木はずっと向こうから、比礼を振りつつこっちへ向かって帰ってくる。その姿を見たときの嬉しさ、45 二人は再会の歡喜に充ち、しばらく休息していると、後より「松」といふ悪鬼が現われ、ギラギラと光った氷の刃で斬りかかってくる。舟木はすぐに比礼を振る、私は神名を唱へる。悪鬼は二三の仲間とともに足早く南をさして逃げてゆく。

どこからともなく「北へ北へ」と叫ぶ声に、機械のやうに私の身体が自然に進んで行く。そこへ「坤<sup>ひつじゑ</sup>」という字のついた、王冠を頭に乘せた ①女神が、小松林という白髪の老人とともに現われて、一本の太くて長い筆を私に渡して姿を隠された。瞬く間に不思議にもその筆の入った筒から硯<sup>すずり</sup>が出る、墨が出る、半紙が山ほど出てくる。そして姿は少しも見えないが、頭の上から「筆を持て」という声がする。二三人の子供が現われて硯<sup>すずり</sup>に水を注ぎ墨を摺ったまま、これも姿をかくした。

私は立派な女神の姿に変化したままで、一生懸命に半紙にむかって機械的に筆を走らす。ずいぶん長い時間がたった、冊数はたしか五百六十七であったやうに思う。そこへにわかにな何物かの足音が聞えたと思うまもなく、前の「中」という鬼が現われ、槍の先に数十冊づつ突き刺し、おりからの暴風目がけて空中に散乱させてしまった。46 そうすると、又もや数十冊分の同じ量の半紙が、私の前にどこからともなく湧いてくる。またはも筆をはしらせねばならぬやうな気がするので、寒風のはげしく吹く野原の枯草の上に坐って、凹凸のきつい石の机に紙を広げ、左手に押さへては、セツセと何事かを書いていく。そこへ今度は眼玉の四ツある怪物を先頭に、②平だの、中だの、木だの、後だの、田だの、竹だの、村だの、与だの、藤だの、井だの印の入った法被<sup>ほつび</sup>を着た鬼がやってきて、残らず引さらへ、二、三百メートル先の草の中へ積み上げて、これに火をかけて焼く。

そこへ、③「西」という色の蒼白い男が出てきて、一抱え抜きだして私の前へ持ってくる。鬼どもは一生懸命に「西」を追いかけてくる。私が比礼をふると驚いて皆逃げてゆく。火は大変な勢で私の書いたものを灰にしている。黒い煙が竜の姿に変わって天上へ昇ってゆく。天上では稲妻のやうに光って、数限りない星と変わってしまった。その星明りに「西」は書類を抱へて、南の空高く姿を雲の中に隠した。女神になっている私の姿は、いつとはなしに又元の囚人の服に ④復<sup>かえ</sup>っていた。急に寒風が吹き荒れて、歯はガチガチと震ってきた。そして何だかおそろしいものに、襲われたやうな寂しい心持がした。

高熊山の御修業のあと聖師は靈界の様子を書かれますが、木だの後だのといった聖師に反対する人々によって焼かれます。この時期ではまだ神界からのお許しがなく発表するには早すぎたのでしょう。大正10年になって、ようやくこの靈界物語は発表されたのです。

## 用語の解説

### ① 女神

この「坤」という字のついた、王冠を頭に乘せた女神になって筆を走らす姿は聖師です。第38巻第11章「思ひ出（二）」に

「綾部へ帰つて見ると、自分の苦心して書いた本は悉く焼かれて了つて居る。神と云ふ字は勿体ないと云つて御苦勞千万にも一々調べて神の字だけを切り抜いて焼いて了つたのだ。其切り抜いた神の字だけが蜜柑箱に数杯あつたが、その一杯丈は今も保存してある。八木清太郎と云ふ男は喜楽《聖師》の書いたもので、方々へ散つて居るのを軒別に廻つて集めて歩いて、それを表具屋へ売つて酒を飲んで、虎列刺に罹つて死んで了つた。こんな風で喜楽の云ふ事は、依然として聞きいれて呉れぬ・・・」とあります。

坤<sup>ひつじま</sup>は坤の金神であり、小松林という白髪の老人もまた聖師の御魂です。

### ② 「平だの、中だの、木だの・・・」

とあるのはみな聖師に反対する役員信者である。四方平蔵、中村竹蔵、木下慶太郎、後野市太郎、村上房之助等か

### ③ 「西」という色の蒼白い男

「西」は聖師の妹婿である西田元教（和歌山の人）であり、この後の聖師のよき理解者であり協力者であった。西田元教氏については謎が多く、今後の詳しい発表が待たれます。

### ④ 復<sup>かえ</sup>っていた

意味は元の服装に返っていたという事であるが、この場合「かえる」は返・帰・還の字が当てられるのが一般であるが、聖師はよく意味から来る漢字を当てられることがあります。

第十章 《二段目の水獄》 [十]

現代語訳

48 私は寒さと寂しさにただ一人、「天照大神」の神号を声をだして申し上げると、急に全身が暖かくなり、空いちめん神光が輝くと間もなく、芙蓉仙人が眼の前に現われた。あまりの嬉しさに近寄り抱付かうとすれば、仙人はついぞ見たこともない険悪な顔つきをして、

『いけません。大王の命令ですから、三ツ葉殿《出口聖師》、私に近寄っては今までの修業が努力のかわりなく無駄に終るでしょう。これで一段目はおおよそ探険されたでしょう。第二段の門扉を開くために来たのです』  
と言いつつうちに、早くもギーと怪しい音がしたと同時に、私は門内に投込まれていた。仙人の影はどこにも無い。

ヒヤヒヤとする氷ついた暗い道を転げながら、地の底へ地の底へとすべりこんだ。真暗で何一つ見えないが、前後左右に何とも言えぬ苦しみもだえる声がある。はるか前方に、女の苦しそうな叫び声が聞える。血醒さい臭気が鼻を衝いて、胸が悪くて吐き気をもよおしてくる。49 たちまち脚元がすべって、何百メートルともわからぬような深い地底へ急変し、直すぐ落ちた。腰も足も頭も顔も岩角に打たれて血まみれになった。神名を申し上げると、私の周囲数十メートル程が少し明るくなった。私は身体一面の傷を見て大変驚き「惟神靈幸倍坐世」を二度繰返して、手に息をかけ全身を撫でさすってみた。神徳たちまち現われ、傷も痛みも全部回復した。すぐに大神様に拍手を打ち感謝した。言霊のもつ不思議な力で周囲は遠くまで暗が晴れわたり、急に明るい気分になってきた。

再び上の方で、ギーと音がした瞬間に、十二三人の男女が転落して私の脚下に現われ、「助けて助けて」としきりに合掌する。私は比礼をその頭上目がけて振ってやると、すぐに起きあがり「三ツ葉様」と叫んで、一同声を合せて泣きけんだ。一行の中には宗教家、教育家、思想家、新聞雑誌記者、くすり屋、医者も混っていた。一行は氷の道をとぼとぼと私の背後からついてくる。

第八章「女神の出現」と同様、聖師（救世主）によって多くの人々が救われた。「宗教家、教育家、思想家、新聞雑誌記者」などこれらの人は大衆を正しい方向に導く立場の人達です。また、「くすり屋、医業者」と言った人達は人の命を扱い、病気を治す人達です。身欲を出すと己はもとよりその指導を受けた人々も地獄に落とすことになります。罪深い彼らは一度の比礼だけでは救われず、サラに聖師について行きます。

第十一章 《大幣の靈験》 [十一]

現代語訳

50 一歩々々わずかずつ前進すると、広大な池があった。池の中には全ていやらしい毛虫でウザウザしている。その中に混って馬の首を四つ合せたやうな顔をした蛇体で角が生えたものが、舌をペロペロと吐き出している。この広い池には、細い細い氷の橋が一筋長く向う側へ渡してあるだけである。後から「松」「中」「畑」という鬼が十字形の尖った槍をもって突きにくるので、前へすすむより仕方がない。十人が十人とも、池へすべり落ちて毛虫に刺され、どれもこれも全身腫あがって、痛さと寒さに苦悶の声をしぼり出し、虫の鳴くように呻っている状態は、ほとんど今にも死にそうな病人と同様である。その上、怪蛇が一人々々カブツとくわえては吐きだし、骨も肉も搾ったようにいぢめている。私もこの橋を渡らなければならない。私は幸にうまく渡り得ても、仲間の人々はどうするであろうかと心配でならない。ためらって進めずにいたところへ、「三葉殿」と頭の上から優しい女の声が聞えて、たちまち一本の①大幣が前に降ってきた。手早く手にとって、思はず 51「② 祓戸大神祓いたまえ清めたまえ」と唱えた。広い池はたちまち平原と変わり、鬼も怪蛇も姿を消してしまった。数万人の老若男女の幽体《精霊》はたちまち生きかえったように元気な顔をして、一斉に「三ツ葉様」と叫んだ。その声は、天地も崩れるほどであった。各自の産土の神は夜空に光る無数の星のように現れなきて、自分の氏子々々を引連れ、歓び勇んで帰って行かれる有難さ。

私は比礼の神器を舟木に渡して困っておったところへ、金勝要神より大幣を戴いたので、百万の援軍を得た気持ちで、名前もわからない平原をただ一人再び進んで行く。

一つの巨大な洋館が、厳かに高く雲の上にそびえ立っている。門口には厳めしい冥官が鏡のやうな眼を見開き、前後左右に首を回して監視している。部下の冥卒が数限りもなく現れ、各自に亡者を残忍に扱うその光景は書きつくせない惨酷さである。私は大幣を振りながら、館内へ歩をすすめた。冥官も、冥卒もただ黙って私の通行するのを知らぬふうをしている。「キヤッキヤッ」と叫ぶ声にふりかへると、52 沢山の婦女子が口から血を吐いたり、槍で腹を突き刺されたり、赤児の群に全身の血を吸われたり、毒蛇に首を捲かれたりして、悲鳴をあげ七転八倒していた。冥卒が竹槍の先で、頭といわず、腹といわず、身体の処かまわず突きさす恐ろしさ、血は流れて滝となり、異臭を放ち、惨状目もあてられぬ光景である。またもや大幣を左右左に二三回振りまわした。今までのすさまじい光景は終わり、婦女子の多勢が私の脚下に涙を流して集まってきて、中には身体に口をつけ「三ツ葉様、有難う、辱なう」と、多くの人が口をそろえて嬉し泣きに泣いている。天はたちまち明るく輝き、各人の産土神は氏子連れ、合掌しながら、光とともにどこともなくお帰りになった。天の一方には歓喜にみちた声が聞える。声は次第に遠ざかって終には風の音のみ耳へ浸みこむ。

大幣の靈験が如何に絶大であるかが伺える。祓戸大神の働きは重要で、天地一切の罪汚れを祓い、宇宙の新陳代謝によって宇宙は正常に保たれるのです。

用語解説

① 大幣 (おおぬさ)

大麻、大幣は、神道の祭祀《神や祖霊をまつる事》においてに使う道具の一つで、櫛の枝または白木の棒の先に紙垂（しで）または麻苧をつけたものである。白木の棒で作ったものは祓串（はらえぐし）とも言う。「大麻」（おおぬさ）という言葉は、本来は「ぬさ」の美称である。「ぬさ」とは神への供え物や、罪を祓うために使用する物のことであり、主として麻や木綿（ゆう）、後には布帛《布と絹》や紙が使われていた。そこから、神事に使う布帛や紙の



ことを大麻と呼ぶようになった。【ウィキペディア】

② 祓戸大神（はらいどのおほかみ）

第6巻 第19章「祓戸四柱」に

天上よりこの光景を眺めたる、<sup>おおくにはるたちのみこと</sup>大国治立命の左守神なる<sup>たかみむすびのかみ</sup>高皇産霊神、右守神なる<sup>かむむすびのかみ</sup>神皇産霊神は、我が精  
霊たる<sup>つぎ</sup>撞の大御神、<sup>かむいざなぎ</sup>神伊弉諾の大神、<sup>かむいざなみ</sup>神伊弉册の大神に天の<sup>ぬほこ</sup>瓊矛を受け黄金橋なる天の浮橋に立たしめ玉  
ひて、<sup>くらげ</sup>海月の如く漂ひ騒ぐ<sup>そうめい</sup>滄溟《あおうなばら》を、<sup>しほこきろ</sup>潮許袁呂許袁呂に掻き<sup>な</sup>鳴し玉ひ、日の大神の<sup>いぶき</sup>気吹に  
よいて、宇宙に清鮮の息を起し、地上一切を乾燥し玉ひ、<sup>せわいじんあい</sup>総ての汚穢塵埃を<sup>の</sup>払ひ退けしめ玉ひぬ。この息  
よりなりませる神を伊吹戸主神（いぶきどぬしのかみ）と云ふ。

<sup>しか</sup>而して地上一面に泥に<sup>まみ</sup>塗れたる草木の衣を脱がしめむため風を起し、風に雨を添へて清めたまひぬ。こ  
の水<sup>い</sup>火より現はれたまへる神を速秋津比売神（はやあきつひめのかみ）と云ふ。再び山々の間に河川を通  
じ、一切の汚物を<sup>やら</sup>神退ひに退ひ給ふ。この御息を瀬織津比売神（せおりつひめのかみ）と云ふ。瀬織津比  
売神は、地上の各地より<sup>うなばら</sup>大海原に、総ての汚れを持ち去り、之を地底の国に持佐須良比  
<sup>うな</sup>失ふ、この御息を速佐須良比売神（はやさすらひめのかみ）と云ふ。以上四柱の神  
を<sup>はらいどのかみ</sup>祓戸神と称し、宇宙一切の新陳代謝の神界の大機関となしたまふ。この機関によ  
つて、太陽、大地、太陰、列星、及び人類動植物に至るまで完全に呼吸し、且つ新陳  
代謝の機能全く完備して、<sup>おのおの</sup>各其の生活を完全ならしめ給へり。この神業を<sup>う</sup>丸山八海  
の<sup>ひむかた</sup>火燃輝の<sup>あ</sup>アオウエイの、<sup>おど</sup>緒所（臍）の<sup>あはぎ</sup>青木原に御禊祓ひたまふと云ふなり。

とあります。これは主神の働きで有り、天地の罪汚れを祓う新陳代謝です。



<sup>はらいどのかみ</sup>祓戸神（祓戸四柱の大神）

<sup>いぶきどぬしのかみ</sup>伊吹戸主神 = 日の大神の<sup>いぶき</sup>気吹によって、宇宙に清鮮の息を起し、地上一切を乾燥  
させ、総ての<sup>おあい</sup>汚穢と塵埃を<sup>の</sup>払ひ退けられる。

<sup>はやあきつひめのかみ</sup>速秋津比売神 = 地上一面の泥に<sup>まみ</sup>塗れたる草木の衣を脱がせるため風を起し、風に雨  
を添へて清めたまう。

<sup>せおりつひめのかみ</sup>瀬織津比売神 = 再び山々の間に河川を通し、一切の汚物を流させたまい。地上の各地より<sup>うなばら</sup>大海原に総て  
の汚れを持ち去る。

<sup>はやさすらひめのかみ</sup>速佐須良比売神 = 之を地底の国に<sup>もちさきすらい</sup>持佐須良比（持去り）<sup>うな</sup>失はせる。

祭典では必ず始めに祓戸行事が行われます。<sup>ひもろぎ</sup>神籬に祓戸神を迎え、大幣によって天地を祓い、神饌物（供物）  
及び祭場、参拝者の罪穢れを祓います。

祭典においての祓う順序は、先ず①神饌物、②玉串と神に捧げる物を祓い、次いで③祭場（家屋）、④参拝者を  
祓います。

## 第二篇 幽界より神界へ

### 第十二章 《 顕 幽 一 致 》 [十二]

#### 現代語訳

一、

55 私が高熊山中において、顕界（我々が住む世界）と、霊界（幽界及び神界）の修行をする中で、自らが実践した事の大概を述べたのは、ほんの一小部分に過ぎない。

宇宙の全ては、①顕幽一致（現実世界と神霊世界とは互いに相応している）、②善悪一如（善と悪とは根本的には同じ）であって、③絶対の善もなければ、絶対の悪もない。従ってまた、絶対の極楽もなければ、絶対の苦難もないといって良い。歓楽（よろこび、たのしみ）の内に艱苦（なやみ、くるしみ）があり、艱苦の内に歓楽もあるものだ。だから地獄の二つの境域である④根の国、底の国に墜ちて、無限の苦悩を受けるのは、要するに、自己の身魂（肉体と靈魂）より産み出した報いである。また⑤顕界に生きる者の靈魂が、常に霊界と通じ、霊界からは、常に顕界と交通を保ち、幾百千万年の間易（かわ）ることはない。神諭に、……天国も地獄も皆自己の身魂より現れ出る。したがって世の中には悲観を離れた楽観はなく、罪悪を別にした人間の変りない価値である真、善、美も成り立たない。苦痛を除外しての、真の快樂は求められるものでない。また凡夫（普通の人）の他に神はない。言葉を換えていえば善悪は同じ事であって、正邪もまた同じであり、真理はただ一つである。……仏教の教典には、「煩惱（迷い）があるからこそ菩提（悟り）が生まれ、生死を繰り返す迷いの世界そのものが、涅槃（理想の境地）である。56 ⑥人間が現実に住んでいるこの世界が本質的には極楽である。仏の心も凡夫の心も本来は同じである」と言うのが真理である。神の道からいへば「神の心も我々の心も本来は同じである」と言うのが真理である。 易：変化する。とりかえる。

二、

仏の大きな慈悲（楽を与え、苦を除く、慈しみの心）とゆうのも、神の道の恵み幸はい（豊に栄える）というのも、また、我々のような凡人の欲望というのも、その本質においては大した変りはない。凡俗（凡夫に同じ）の持っている性質そのままが神であるといってよい。また、神の持つておられる性質の全体が、ことごとく凡俗に備はっているといてもよい。

天国や極楽と我々が住む社会とは、その本質において、少しの差異もないものである。このように本質においては全く同一のものでありながら、⑦どうして神と人、浄いと穢れ、正と邪、善と悪に分れるのであろうか。要するにこの生まれつきの性質を十分に發揮して、適当な活動をすると、しないとの程度の差に対して、付けられた仮の符号に過ぎないのだ。

⑧善悪というものは決して一定不変のものではなく、時と処と位置とによって、善も悪となり、悪も善となることがある。

⑨「道の大原<sup>たいげん</sup>」には、「善は広く一般社会の公共のために行われ、悪は個人の利益のためにすること。心を正しくし道徳にかなった良い行いは善であり、正しくないこと、何もしないことは悪である」と。何ほど善い事といっても、自分一人のための私有にしようとする善は、57 決して真の善ではない。たとへ少しぐらい悪が有っても、天下公共のためになる事であれば、これはやはり善と言なければならない。文王（中国周王朝を創建）がいったん怒れば天下が治まったと言う。怒ることも時には必要であるといえる。

三、

これより推し量って考える時、小さな悲観は取るに足らないとともに、釈迦の根本的教説に反する原因や縁（因縁）を考えない（勝論外道的）で勝手に事物を楽観視すること（暫有的小楽観）もいけない。大楽観と大悲観とは結局同じであって、神は大楽観者であると同時に、大悲観者である。

凡俗は小さな悲観者であり、また小さな楽観者である。社会といい、娑婆といい、現界と言うのも皆小苦小楽

の世界であり、靈界は、大楽大苦の位置にある。理趣経（大乘仏教の経典）には、「人間の欲深い心や愚かな心はそのまま悟りであり、これはすべてのものの真実のすがたにかなった知恵を悟った境地である。また、肉体の欲望もそのまま悟りへの道である」とあって、いわゆる世間の種々のすがたがそのままに深遠な道理を表わしている（当相即道）が究極の真理である。

禁欲主義はいけない、恋愛は神聖であるという、しかもこれを自然主義的に、本能的に行う行為が自分と同程度に行って、満足しているのが凡夫である。これを拵げて宇宙大に実行するのが神である。

四、

神は神界、幽界、現界の三界にいる神や人を、皆わが愛子とし、宇宙間にある全ての物を救おうとする大欲望がある。58 凡俗はわが妻子や身内のみを愛し、すこしも他を顧みないのみならず、自分だけが満足し、他を省みないで、小ざかしい欲望を得ようと自己本位に振る舞うものである。⑩人の身魂そのものは本来は神である。従って宇宙大に活動出来る生まれながらの本能を備えている。それでこの生まれつき持っている本質である、⑪智、愛、勇、親を開発し、実現するのが人生の本分である。これを善悪の標準論からみれば、自分自身の意識や行動を確立しようとする考え（自我実現主義）と言ってもよいのであろうか。自分の内にある善悪両面の働きが、社会人類の救済のために、そのまま賞罰両方の大活動をあらわすやうになるものである。この大きな威力と活動とが、すなわち神であり、いわゆる己の意識や行動（自我）を宇宙にまで拡大することである。

いづれにしても、この⑫六つの迷界に生まれかわり死にかわりする肉体と、仏教でいう、迷いとどされ、雑多な思想に染まっている凡夫そのままの心を捨てず、また苦しみやけがれ、汚れや罪悪に満ち、不公平な現実社会から離れず、ことごとくこれを美化し、楽化し、天国浄土を眼前に実現させるのが、⑬成神観であり、また、最も肝心なところである。

一、

宇宙の全ては、顕幽一致、善悪一如であって、絶対の善もなければ、絶対の悪もない。また、絶対の極楽もなければ、絶対の苦難もないという良い。歓楽の内に艱苦があり、艱苦の内に歓楽もあるので、地獄に墜ちて、無限の苦悩を受けるのは、自己の身魂より産み出した憎しみや、妬み等の報いである。

迷いがあるからこそ悟りが生まれ。迷いの世界そのものが、理想の境地である。人間が現実に住んでいるこの世界が本質的には極楽である。神の心も我々の心も本質は同じであると言うのが真理である。

二、

仏の慈悲も、神の道の恵み幸はいも、また、我々のような凡人の欲望というのも、その本質においては大きな違いはない。我々が持つ性質そのままが神であり、神の持つておられる性質の全体が我々に備はっている。天国や極楽と我々が住む社会とは本質において同じである。では、神と人、浄と穢、正と邪、善と悪がどこで分かれるのかと言えば「生まれつき持っている神と同じ性質を十分に発揮し、それを適当に活動するとしないとの程度の差に対して付けられた、たんなる符号に過ぎない」とあります。

善悪というものは決して一定不変のものではなく、時と処と位置とによって変るのです。我々が普段、善と思っていることも時処位によって悪となり、悪もまた善となることがあるのです。「道の天原」には、「善は広く一般社会の公共のために行われ、悪は個人の利益のためにすること。心を正しくし道徳にかなった良い行いは善であり、正しくないこと、何もしないことは悪である」とあります。

三、

小さな悲観は取るに足らないと同時に、それが起こる原因や因縁を考えないで勝手に事物を楽観視することもいけない。大楽観と大悲観とは結局同じで、神は大楽観者であると同時に大悲観者です。凡人は小さな悲観者であり、また小さな楽観者です。我々の住む社会は皆小苦小楽の世界であり、靈界は大楽大苦の世界にある。理趣

経には「人間の欲深い心や愚かな心はそのまま悟りであり、肉体の欲望もそのまま悟りへの道である」とあって、世間の種々のすがたがそのままに深遠な道理を表わしているのが究極の真理です。

物事を本能的に行うとき、自分と同程度に行って満足しているのが凡人であり、これを宇宙にまで拡大して実行するのが神様です。

四、

神は宇宙間にある全ての物を救おうとする大欲望がお有りになる。我々には自分の身内だけを愛し、すこしも他を顧みないで、自分だけの欲望を得ようと自分勝手な振る舞をする。

人の身魂は本来神です。従って宇宙大に活動出来る生まれながらの本能を備えています。それで生れつき持っている本質である、智、愛、勇、親を開発し実現するのが人生の本分です。

これを善悪の標準論からみれば、自分の内にある善悪両面の働きを社会人類の救済のためにする、この大きな威力と活動力がすなわち神です。己の意識や行動（自我）を宇宙にまで拡大することです。

迷いから抜け出せず、雑多な思想に染まっている愚か者そのままの心を捨てず、また苦しみやけがれ、汚れや罪悪に満ち、不公平な現実社会から離れず、ことごとくこれを美化し、楽化し、天国浄土を眼前に実現させるのが神に成れる道であり、また、最も肝心なところです。

## 用語の解説

### ① 『顕幽一致』 第二章 注②「顕幽一致、身魂一本」【上 P48 参照】

「顕幽一致」 顕幽の顕とは現れる世界、我々が住む現実世界であり、幽は見えない世界、隠れた世界でここでは霊界（神界、中有界、地獄界）を指します。したがって顕幽一致は現実世界と見えない幽界とは一致と言うことです。霊界で起きる事は現界に現れ、現界に起きる事もまた霊界で見られます。それは霊眼（大本独特の言い方か）という言葉で示されるように、特殊な能力を持った人には霊界の事象を見る事が出来るのです。一般的には霊視とか霊能者というようですが。

また、我々は死後霊界に入りますが、心肺停止（人の死）の後死んで霊界に入っても死んだという感覚はないそうです。天国には土農工商があり、山野河海があり薨の並んだ都市もあります。生前の仕事をそのまま続けるそうです。従って、霊界にある物は全て現界にあります。

### ● 顕幽という考え

ここで顕幽について詳細に見ていきましょう

出口王仁三郎著作集 第一巻の大本略義（抜粋）（大正5年9月）に以下のように示されています。

「眞 神」

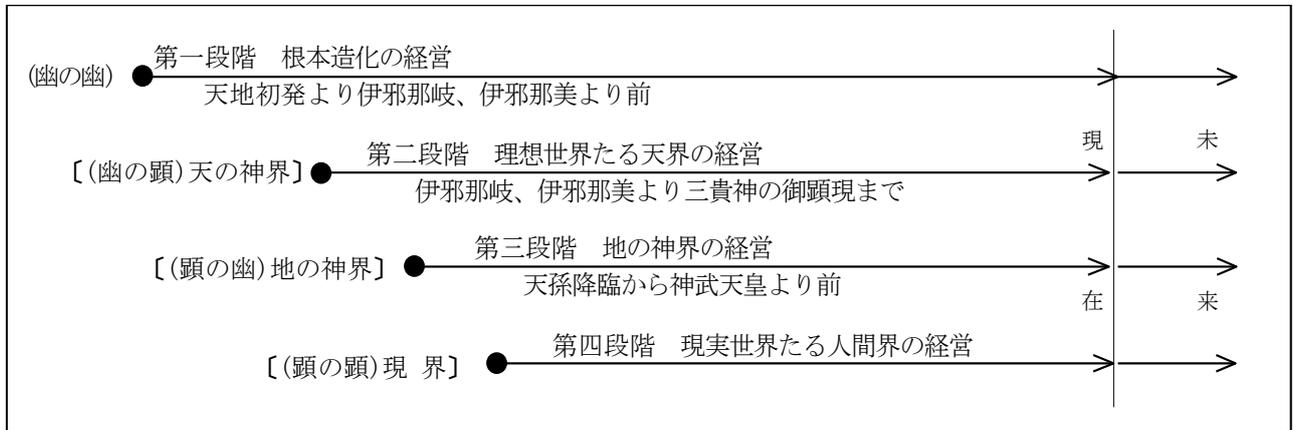
大本の真意義を根本的に理會《事の道理を会得すること》せんが為には、是非とも宇宙の独一真神天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）に就きて、判然《はっきりとよく分かる》とした觀念を有する事が必要である。これが信仰の真髓骨子《肝心な事や要点》となるのであって、この事の充分徹底せぬ信仰は、畢竟《つまるところ》迷信に墮《おちいる》してしまう。但し神に就きての誤らざる觀念を伝える事は、実に至難中の至難事である。其神徳が広大無辺であると同時に、其の神性《神の性格。精神》は至精至妙《極めて精密でたくみなこと》で、いかに説いても、何う書いても、これで充分という事は、人間業では先ず望まれない。されば本邦の皇典『古事記』にも、単に造化の第一神として、<sup>ひつぎょう</sup>髣髴《まっさき》に御名称を載せてあるに過ぎぬ。

天之御中主神は宇宙の創造神であり、我々が最も<sup>まつだい</sup>崇敬すべき神様です。これまで日本人の中に真神の存在觀念がなかったのでこの神の御名を知ることだけでも意義があります。

「顕幽の神称」

天之御中主神の御神業は、大別して四階段を成して居る。第一段が天地初発の根本造化の経営で、皇典  
 でいえば、伊邪那岐、伊邪那美以前である。第二段が理想世界たる天界の経営で、主として、伊邪那岐、  
 伊邪那美二神の御活動に係り、三貴神の御顕現に至りて、それが一と先ず大成する。

第三段が地の神界の経営で、天孫降臨から神武天皇以前に達する。第四段が現実世界たる人間界の経営  
 である。此四階段は、決して単に時代の区別ではない。寧ろ方面の区別である。換言すれば第一段が全部  
 済みて第二段の経営に移り、順次に第三、第四段と成って来たのではなくして、四階段同時の活動であり、  
 経営である。そして現在に於ては、何れも未製品で、不整理、不整頓を免れず、又各階段の連絡も充分で  
 ない。『大本神論』の所謂「世の大立替大立直」を待ちて、始めて目鼻がつくという状態に成って居る。



無論、天だの、地だの、神だの、人だのが、ごちゃごちゃに同時に出来上ったのではなく、秩序整々、適  
 当の順序を以て発生顕現したのであるから、其点から考うれば、時代という考もなくてはならぬ。矢張り  
 第一段の経営が真先に始まり、第二段の経営が之に続き、第三段、第四段とは成って来たのだ。ただ四階  
 段の経営が、悉く現在まで引続き、そして今後も永久に続くのである事を忘れてはならぬ。此事が充分腑  
 に落ちて居らぬと、天地経綸の真相は到底会得し得ない。

■幽の幽

宇宙の大元靈《天之御中主神》から、陰陽の二元が岐れ、それが万有の根元であると云うことは、既に説  
 明した。此の原則は何処まで行っても厳格に守られ、神界も現界も常に陰陽二系の併立を以て終始一貫  
 する。〔陰陽の二元が万有の根元〕 岐：わかれる。(道が) 枝状に分かれる

「幽之幽」の神々は、天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神、〔宇麻志阿志詞備比古遲神、天之常立神〕、  
 〔国之常立神、豊雲野神〕、〔宇比地邇神、須比智邇神〕、〔角杭神、活杭神〕、〔意富斗能地神、大斗能弁  
 神〕、〔於母陀流神、阿夜詞志古泥神〕等である。天之御中主神が活動を起して、宇宙内部に進左退右の  
 運動が開始されたとなると、此の「進左」と「退右」という正反対の根本的二大力を司るべきもの、即ち  
 「進左」と「退右」との体现者がなければならぬ。それが即ち高御産巢日神と神産巢日神とである。高御  
 産巢日神は「進左」を司りて、靈系の祖神であり、神産巢日神は「退右」を司りて、体系の祖神である。

- 高御産巢日神〔高皇産靈神〕 「進左」 靈系：主、君、天、男、表、上、靈界の経綸
- 神産巢日神〔神皇産靈神〕 「退右」 体系：従、臣、地、女、裏、下、現界の造営

宇麻志阿志詞備比古遲神 以下 阿夜詞志古泥神までは靈体二系、六対の神である。

例えば

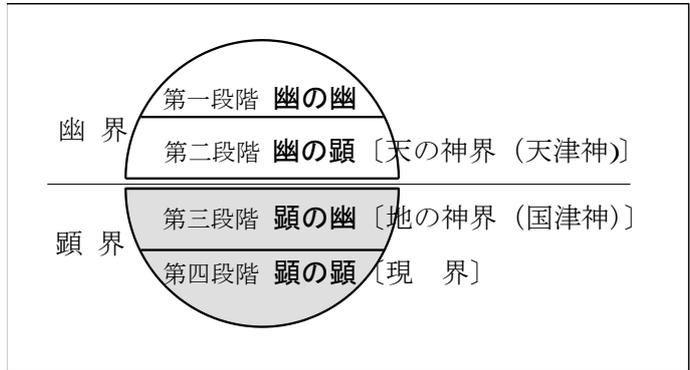
- 比古遲神は、 靈系に属し、温熱を供給し、万物を化育する根元の働きを宰る。
- 天常立神は、 体系に属し、水系を集結し、天体を構成整理する根元の働きを宰り玉う。
- 国常立神は、 靈系に属し、経に大地の修理固成に当り、一貫不変の条理を固守せしむる根本の働きを宰る。

豊雲野神は、体系に属し、緯に天地の修理固成に当り、気候、風土等の如何に応じて、異別的特色を發揮せしむる根本の働きを宰り玉う。

「幽之幽」は神界の奥の奥に位し、天地万有發生の基礎を分担さるる根本の祖神の活動所で、「顕之顕」に活動する人間からは、容易に窺知《うかがい知る》する事が出来ない。靈力体を具えらるる神々であるから、其原質《もとの性質》は、敢て人間と違った所はない、言わば人間と親類筋であるが、清濁、大小の差が大変違う。

■幽の顕

「幽之幽」神界は、宇宙内部の活機を掌る所で、即ち造化の根源は爰に発するのであるが、此所の活動では、現象としては宇宙間に何等の痕跡も現出せぬ。「幽之顕」神の顕現に及んで、始めて或程度迄、現象にも現われて来る。「幽之顕」界は宇宙を舞台として活動する神々の世界で、人間界から之を見れば一の理想世界である。

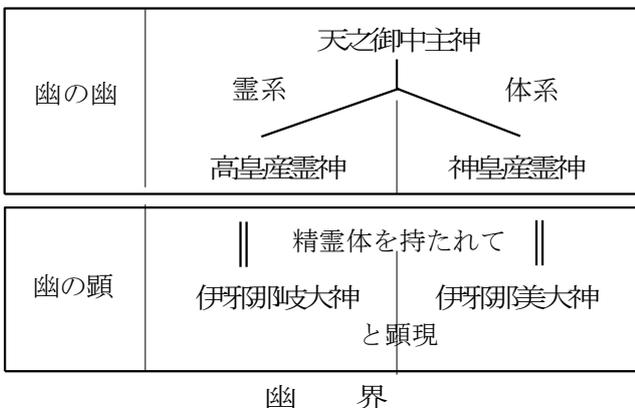


高皇産靈神、神皇産靈神は幽の顕界では伊邪那岐大神、伊邪那美大神と現れられたのである。

天地剖判のおり天地が別れ、大地より日月、大地、星辰が生まれたのは天之神界の創造大成である。即ち、天津神の精靈体《一種の肉体》の出現です。我々が見る天体の日月、星辰は天津神そのものなのです。

『古事記』上卷、伊邪那岐、伊邪那美二神の御出生から始まり、二神が多く島の島々やら草木、山川、風雨等の神々をお産みに成り、最後に天照大御神、月読命、建速須佐之男命の三貴神をお産みになるまでの話は、実は天之神界の経営組成の大神業を神話風に描いてある。

三貴神の出現は天地を治められる神の誕生を表します。即ち、伊邪那岐大神、伊邪那美大神によって生まれた天津神（島々、草木、山川、風雨等の神々）を統治される神が三貴神です。天は太陽の世界を天照大御神様が、太陰の世界を月読命が治めます。地（大海原）は建速須佐之男命が治められます。ここまでが幽の顕界の一応の完成です。



天照大御神 . . . . . 天の太陽の世界  
 月読命 . . . . . 天の太陰(月)の世界  
 建速須佐之男命 . . . . . 地(大海原)の世界  
 をそれぞれに治められる

■顕の幽 【巖瑞二靈より】

天之神界を組織する所の天津神に対し、地の神界の神々を国津神と称える。即ち国津神は、大地の内部を舞台として活動する所の神々を指すのである。

最初大地は、今日の如き凝集固成した一小天体ではなく、其太初にありては天地未だ剖判せず、宇宙全体は天にして、同時に又、地であった。それが造化陰陽二系の神々の活動の結果、縮小して先ず大々地とな

り、更にそれが分裂して八百万<sup>や およろず</sup>の天体と成り、最後に宇宙の中心に現在の大地を成した。・・・

大地は宇宙間にありて最重要の位置を占むる中心の統一機関で、其中には、あらゆる天体の要素一切を包含して居ることは、科学の研究の結果から見ても明白である。八百万の天津神の分靈は、悉く大地に宿りて居る。それが八百万の国津神の靈魂であるのだ。天津神も八百万、国津神も八百万、そして本靈と分靈とは相呼応して、天と地との経綸を行うのである。・・・

国津神の発生は大地の凝結集成と其時を同うし、之を經營すべき使命を帯びて発生したのであるが、其順序手続も、人間界から観れば随分距離が遠く、自然力とか造化の働きとか云って仕舞いたくなる。天津神々

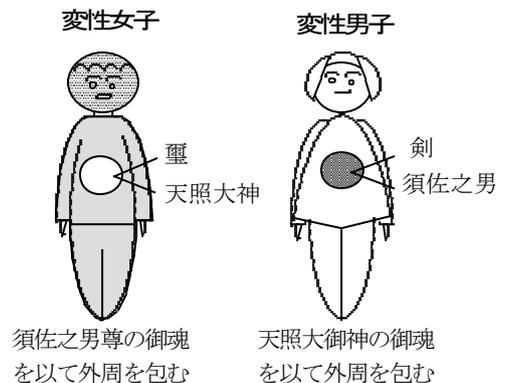
を産み成し給うたのは、「ウ」「ア」の二大言靈を受持ち給う所の伊邪那岐、伊邪那美の二祖神であったことは既に述べたが、国津神を産み成すべき大神事を分掌し給うたのは、靈系（天）に属して高天原を主宰し給う天照大御神、及び体系（地）に属して地球を主宰すべき素佐之男尊の二神であった。要するに、さきに岐美二神の行われたる同一神事を小規模とし、之を大地に対して行われたので、之を天然現象として言い現わせば、火と水との調和<sup>あんぱい</sup>により、土中から神々を発生せしたのである。・・・

古事記には、天の八洲河に於ける璽劍<sup>たまつるぎ</sup>の「誓約<sup>うけい</sup>」の段でこの事が表されている。

須佐之男尊は体系（陰系、水系、地系）の活動力である。この活動力を表現する劍を中枢とし、靈系（陽系、火系、男系、天系）の活動力たる天照大御神の御魂を以て外周を包めば、生れたものは三女神である。それと正反対に、天照大御神の御魂（璽）を中枢とし、須佐之男尊の御魂を以て外周を包むと、生れたものは五男神である。男性と女性との生まるる神界の秘奥は、ここに示されている。即ち女性の生まるる場合、陰が陽に包まれ、男性の生るる場合は、陽が陰に包まる。陰陽一對の二神は、かくしてある時は女性を生ましめ、ある時は男性を生ましむるのである。・・・

変性男子<sup>へんじょうなんし</sup>： 外姿は女性なれど、その内性は男性である。五男神とは、即ち五つの御魂である。嚴御魂である。左の系統、火の系統で、稜威しき御魂である。

変性女子<sup>へんじょうにょし</sup>： 外姿は男性なれども、その内性が女性である。瑞の御魂である。三女神とは即ち三つの御魂である。右の系統、水の系統で、円満美麗にして、みずみずしい御魂。



地の神界の経綸も其根本に於て、変性女神たる須佐之男尊と、変性男神たる天照大御神の誓約<sup>うけい</sup>に基いて出来た。人界の経綸も矢張り同一組織で遂行さるので、現に大本も、嚴の御魂と瑞の御魂との結合によりて、始めて基礎が出来、活動が出来ることになっている。人倫の大本たる夫婦の関係も同様である。嚴と瑞との靈的因縁ある二個の肉体が合一して、初めて其天職を完全に遂行し得る。

【大本略儀】

最後に第 21 卷の総説を載せておきます。

靈界は想念の世界であつて、無限に広大なる精靈世界である。現実世界は凡て神靈世界の移写であり、又縮図である。靈界の真象をうつしたのが、現界、即ち自然界である。故に現界を称してウツシ世と言ふのである。例之一万三千尺の大富士山を僅か二寸四方位の写真にうつした様なもので、その写真が所謂現界即ちウツシ世である。写真の不二山は極めて小さいものだが、其実物は世人の知る如く、駿、甲、武三国にまたがった大高山であるが如く、神靈界は到底現界人の夢想だになし得ざる広大なものである《顕幽一致》。僅か一間四方位の神社の内陣でも、靈界にては殆ど現界人の眼で見る十里四方位はあるのである。

凡て現実界の事物は、何れも神靈界の移写であるからである。僅に一尺足らずの小さい祭壇にも、八百万の神々や又は祖先の神靈が余り狭隘を感じ玉はずして鎮まり給ふのは、凡て神靈は情動想念の世界なるが故に、自由自在に想念の延長を為し得るが故である。三尺四方位の祠を建てておいて下津岩根に大宮柱太敷立、高天原に千木高知りて云々と祝詞を奏上するの、少し許りの供物を献じて、横山の如く八足の机代に置足らはして奉る云々とある祝詞の意義も、決して虚偽ではない。凡て現界はカタ即ち形の世界であるから、その祠も供物も前に述べた不二山の写真に比すべきものであつて、神靈界にあつては極めて立派な祠が建てられ、又八百万の神々が知食しても不足を告げない程の供物となつて居るのである。凡て世界は靈界が主で現界即ち形体界が従である。一切万事が靈主体従的に組織されてあるのが、宇宙の真相で大神の御経緯である。現実界より外に神靈界の儼然として存在する事を知らない人が斯んな説を聞いたならば定めて一笑に付して顧みないであります。無限絶対無始無終の靈界の事象は、極限された現界に住む人間の智力では、到底会得する事は出来ないでせう。

この物語は、現、幽、神、三界を一貫し、過去と現在未来を透徹したるが故に、読む人々に由つて種々と批評が出るでせうが、須らく現実界を従とし、神靈界を主として御熟読あらば、幾分か其真相を掴む事が出来るであらうと思ひます。 惟神靈幸倍坐世。 大正十一年五月廿一日

【21/総説】

この世は靈界の「移写。写し世」だと解かれている。従つて靈界が主で現界が従となるのは当然である。宇宙の成り立ちもまた靈が先で体が後であった。「一切万事が靈主体従的に組織されてあるのが、宇宙の真相で大神の御経緯である」。靈界物語もこうした観点から読まないといふと正しく理解できない。

② 「善悪一如」は 善も悪も同じということ。

歓楽も艱苦もそれは心に感ずる程度の差である。善きことをすれば善事の度合いに応じて歓楽の度合も大きく、悪をすれば悪事の度合いに応じて艱苦の度合いも大きい。

なんら苦痛の伴なわない、本当の快楽はない。また平々凡々たる普通人（凡夫）の他に神は居ない。善とか悪とかいっても本質は同じであり、正邪もまた同じである。真理はただ一つである。

迷い（煩惱）があるからこそ悟り（菩提）が生まれる。歓楽（善）というのも艱苦（悪）と言うのも自己の心の内にあるので他人の物ではない。であれば、自分の心の内に天国を築くことが大切であり、その努力が必要です。

③ 「絶対の善もなければ、絶対の悪もない」

何度も言うがこの宇宙は相反する二元から出来ています。陰陽であり、言葉を換えていえば善悪、正邪、美醜、経緯等これら二元の結合によって宇宙に力が生まれ全てが生成化育しているのです。従つて善の中に悪が混在し、悪の中に善が存在しています。言い換えれば善という言葉が存在するのは悪という言葉があるからです。相反する状態において一方が100で他方が0であればその状態（言葉）は存在しなくなります。善が存在するのはその対極に悪があるからであり、悪が存在するのもそこに善があるからです。従つて他者を一方的に悪と決めつける事は絶対にしてはいけないことです。

④ 「根の国、底の国に墜ちて、無限の苦悩を受けるのは、要するに、自己の身魂より産出したる報いである。」人は他人を呪って成功してもその時だけ喜びはあるが、その後は必ず犯した罪に苦しむものです。本来が性善であるから悪を働けば必ず苦しむのが神の摂理です。よく言われるように己のともした火に焼かれて苦しむのです。別な言い方をすれば自己が生んだ罪悪感によって自分を苦しめるのです。また、神諭にあるように「天国も地獄も皆自己の身魂より現れ出る」のです。「根の国、底の国に墜ちて、無限の苦悩を受けるのは、自己の身魂（肉体と靈魂）より産み出した報いである。」

余談だが地獄に落ちる極悪な魂は死後ただちに、地獄より自己が造りだした火の車が迎えに来るといふ。

⑤ 『顕界に生きる者の靈魂が、常に霊界と通じ、霊界からは、常に顕界と交通を保ち、幾百千万年といへども算<sup>算</sup>ることはない』

そもそも霊界というものが有るのか無いのか、「幽霊を見たり枯れ尾花」などと幽霊など存在しないという人が居る。UFOや宇宙人と同じである。UFOを未確認飛行物体とすれば未確認というのだから議論の余地無く存在するがそこに宇宙人が存在するかとなれば議論は分かれる。聖師はいわゆる知的生命体は地球以外に存在しないと示されているが単なる生命体は何とも言っていない。

現代科学では靈魂の存在を証明できていないので万人がこれを是とはしないが、仮に無いとするなら人生は何とつまらぬものと成ることか。人は永遠にその生命が存在すると信じるからこそ人生が楽しく有意義になるのである。もし貴方の生命が地球の歴史四〇億年の中のわずか100年という一瞬で終わるなら何の意味があるのだろうか。生き変わり死に変わり永遠に続くと思うからこそ意義を感じられるのではないだろうか。死後何の痕跡も残さないのであれば人として生きる価値をどこに見出すのであろう。歴史に名を残すほどの偉人ならいざ知らず、我々凡夫はそこに生きたという何らの痕跡も見出せない。それで自分の人生に満足がいくのだとしたら私とは全く異質な生き物である。人の命は地球より重しなどという言葉も何の意味を持つのであろうか。子孫を残す意味もなく、どんなに罪を犯そうと、どんなに善行をしようとその本人に何の意味もないのではないだろうか。永遠に生きるからこそ努力や慈しみが実りあるものとなるのです。

大本では過去に聖師の許しがあつて、<sup>霊眼</sup>といっているいろいろな霊界での事象を見る能力を備えた人が居たようです。先に述べたように霊界は神界、中有界、地獄界に別れます。生きている我々の魂もそのどこかに所属しています。そして己の所属する霊界と行き来しているのです。よくTVなどで霊能者と言われる人が人の過去等を透視をします。教えに依ればそうした能力を備えた人と云えど自分の所属する霊界は見えてもその他の世界は見えないようです。

又、人の思いはその思いの世界を霊界に作ります。それは顕幽一致だからです。現界に起きた一つの想念は好かれ悪しかれ霊界に形を現します。

相思相愛であれば気持ちはなんとなく通じ合うものです。思いによって作られた霊界に二人は常に行き来しているからです。

科学の発見発明で同時に二人の人が同じ成果を発表することがあります。それは何故でしょうか？

この文を書くに当たって確かな例が無いインターネットで調べました。その記事。

雑誌ニューヨーカーに掲載された、ネイサン・ミアボルドの発明工場に関する記事で、マルコム・グラッドウェルが科学史研究者の研究成果を紹介している。それによれば、同時発明はよくあることだという。どの時代にも、発明は同時になされている。主要な科学的発見のうち、重複型に当てはまるものが148件あった。ニュートンとライプニッツは、いずれも微積分を発見した。チャールズ・ダーウィンとアルフレッド・ラッセル・ウォレスの二人は、進化を発見した。3人の数学者が小数を「発明」した。酸素はウィルトシャーのジョゼフ・プリーストリーが1774年に発見したが、さらに、その前年にウプサラのカール・ヴィルヘルム・シェーレが発見している。等々

科学の発見もAと言う科学者の研究（思い）が霊界を作ります。全然見ず知らずのBと言う科学者も同じ研究をすればAが作った霊界に必然的に出入りすることになります。同じ霊界を共有すれば研究も同時に進行し、完成します。ほんの一瞬発表が早ければその分野の研究者としてその名が後世に残ります。

別の見方をすれば楽しい思いをすれば楽しい天国的世界を作り出し、死後も自分の作りだした天国に行くことになります。それと反対に憎い、悔しいと恨んでおればその思いの世界を霊界に作りだし、そこから脱却（改心）できなければ、生きている間からその霊界と行き来し、死後自分の作った地獄へ直ちに行くことになります。人は生前から神の教えを学び正しい生活が必要です。

参考

第11卷第3章 「死生観」について

時公「・・・最前貴方のおつしやつた、私の何万年とやら前に生て居つたとか云ふ、その訳を聞かして下さい』

東彦『今度は真面目に聞きなさい。人間と云ふものは、神様の<sup>い</sup>水火から生れたものだ。神様は<sup>まんがふまつだい</sup>万劫未代生通した。その神様の<sup>わけ</sup>分霊が人間となるのだ。さうして、肉体は人間の<sup>い</sup>容れ物だ。この肉体は神の宮であつて、人間ではないのだ。人間はこの肉体を使つて、神の御子たる働きをせなくてはならぬ。肉体には<sup>い</sup>栄枯盛衰があつて、何時迄も花の盛りで居ることは出来ぬ。されどもその本体は<sup>い</sup>生替り死替り、つまり肉体を新しくして、それに<sup>は</sup>這入り、古くなつて用に立たなくなれば、また出直して新しい身体に宿つて来るのだ。人間が死ぬといふことは、別に<sup>うれ</sup>憂ふべき事でも何でも無い。ただ墓場を越えて、もう一つ向ふの新しい肉体へ入れ替ると云ふ事だ。元来神には<sup>い</sup>生死の区別がない、その分霊を<sup>う</sup>享けた人間もまた同様である。死すると云ふ事を、今の人間は非常に<sup>い</sup>厭な事のやうに思ふが、人間の本体としては何ともない事だ』

時公『さうすれば、私は何万年前から生て居つたと云ふ事が、自分に分りさうなものなのにチツとも分りませぬ。貴方のおつしやる通りなら、前の世には何と云ふ者に生れ、何処にどうして居つて、どういう手続きで生れて来たると云ふ事を覚えて居りさうなものです。さうしてそんな結構な事なれば、なぜ今はの際まで、死ぬと云ふことが厭なやうな気がするのせうか』

東彦『そこが神様の有難いところだ。お前が前の世では、かう云う事をして来た、靈界でこんな結構なことがあつたと云ふ事を記憶して居らうものなら、ア、ア、こんな辛い戦ひの世の中に居るよりも、元の靈界へ早く帰りたい、死んだがましたと云ふ気になつて、人生の本分を<sup>あ</sup>尽す事が出来ない。総て人間が此世へ肉体を備へて来たのは、神様の<sup>あ</sup>或使命を果す為に来たのである。死ぬのが<sup>あ</sup>惜いと云ふ心があるのは、つまり一日でもこの世に長く居つて、一つでも余計に神様の御用を勤めさせる為に、死を恐れる精神を<sup>あ</sup>与へられて居るのだ。実際の事を云へば、現界よりも靈界の方が、いくら楽いか面白いに分つたものでない、いづれ千年先になれば、お前も私も靈界へ這入つて「ヤア、東彦様」「ヤア時様か」「どうして居つた」「お前は何時死んだのか」「さうだつたかね、ホンニホンニ何時やら死んだやうに思ふなア」ナント云つて互に笑ふ事があるのだ』

時公『ア、そんなものですか。そんなら私の様に、この様に長生をして罪を作るより、罪を作らん中に、早く死んだ方が却つて幸福ですなア』

東彦『サア、さう云ふ気になるから、靈界の事を聞かすことが出来ぬのだ。この世ほど結構なところは無い。一日でも長生をしたいと思つて、その間に人間と生れた本分を<sup>あ</sup>尽し、一つでも善いことを為し、神様の為に御用を勤めて、もう是でよいから靈界へ帰れと、天使の御迎ひがある迄は、<sup>あ</sup>勝手氣儘にこの世を去る事は出来ぬ。何ほど自分から死に度いと思つても、神が御許しなければ死ぬ事は出来ぬものだ』

時公『一つ尋ねますが、私が子供の時は、西も東も知らなかつた。昔から生通しの神の<sup>あ</sup>靈魂であるとすれば、<sup>あ</sup>子供の時から、もう少し何も彼も分つて居りさうなものなのに、段々と教へられて、追々に智慧がついて来たやうに思ひます。是は一体どう云ふ訳ですか』

東彦『子供の肉体は虚弱だから、それに<sup>あ</sup>応ずる程度の魂が宿るのだ。全部本人の靈魂が肉体に移つて働くのは、一人前の身体になつた上の事だ。それ迄は少し<sup>あ</sup>宛生れ替るのだ』

時公『さうすると人間の<sup>あ</sup>本尊は十月も腹に居つて、それから、あと二十年もせぬと、スツカリと生れ替る事が出来ぬのですか』

東彦『マアそんなものだ。併し何ほど靈界が結構だと云つても、人生の使命を<sup>あ</sup>果さず、悪い事を云うたり、悪ばかりを働いて死んだら、決して元の結構な処へは帰る事は出来ぬ。それこそ根の国底の国の、無限の責苦を受るのだ。それだから此生の間に、一つでも善い事をせなくてはならぬ』

⑥ 『娑婆則浄土』（人間が現実に住んでいるこの世界が本質的には極楽である）。

これまでのことから解るように幽界も現界も本質は何ら変わりがないので、死後の天国の生活を願うなら現界での生活も極楽の生活でなければ死後天国には行けません。

人は物質に恵まれているから天国（心の安らぎ）と感ずるのではなく、心が満ち足りているから天国となるのです。端から見て貧しくとも本人の心が満ち足りているなら天国です。心が感ずる生活をしなければいつまでたっても天国は来ません。人は執着という限りない欲望によって三毒（貪欲・瞋恚・愚痴 9P 参照）を生みます。むしろ物質から離れた方が、物に執着しない生活が天国をもたらすのです。

⑦ 『何ゆゑ神俗、浄穢、正邪、善悪が分るるのであろうか』

「天国と我々が住む社会とはその本質において、少しの差異もない」と書かれています。「ではどうして神と人、浄いと穢れ、正と邪、善と悪に分れるのかと言えば、生まれつきの性質を十分に發揮して、適当な活動をする、しないとの程度の差に対して、付けられた仮の符号に過ぎない」とあります。この「生まれつきの性質」とは神の持つておられる性質を我々も同様に持つており、それを十分に發揮できた場合を浄と言ひ、正と言ひ、善と言ひます。これらを宇宙にまで發揮するのが神であり、自分の身の回りに發揮するのが人なのです。そして、神とは反対の行為をするのが邪神で、また何もしないことも悪です。

⑧ 善悪といふものは決して一定不変のものではなく、時と処と位置《立場》とによって、善も悪となり、悪も善となることがある

第6巻 第20章 「善悪不測」に

人は一つの善事を爲さむとすれば、必ずやそれに倍するの悪事を<sup>しらずしらず</sup>不知不識に為しつつあるなり。故に人生には絶対的の善も無ければ、又絶対的の悪も無し。善中悪あり、悪中善あり、水中火あり、火中水あり、陰中陽あり、陽中陰あり、陰陽善悪相混じ、美醜明暗相交はりて、宇宙の一切は完成するものなり。故に或る一派の衆派の唱ふる如き善悪の真の區別は、人間は愚か、神と雖<sup>いまだ</sup>も之を正確に判別し給ふことは出来ざるべし。……中略……重く濁れるものは地となり、軽く清きものは天となる。然るに大空のみにては、一切の万物發育するの場所なく、また大地のみにては、正神の空気を吸収すること能はず、天地合体、陰陽相和して、宇宙一切は永遠に保持さるるなり。また善悪は時、所、位によりて善も悪となり、悪もまた善となることあり。実に善悪の標準は複雑にして、容易に人心小智の判知すべき限りにあらず。故に善悪の審判は、宇宙の大元靈たる大神のみ、其の権限を有し給ひ、吾人はすべての善悪を審判するの資格は絶対無きものなり。

人を殺すことは悪であるがこの時所位で考えた時、全てが悪とは限定できません。

- 1、時： 大量虐殺を実行しようとしている人を、その行為の前に殺せば善であるが、その行為の後に殺せば意趣返し（リンチ）でしかない
  - 2、所： 人殺しは悪であるが戦争で人を殺せば勲章が貰える。
  - 3、位： 個人的立場で人を殺せば悪であるが、死刑執行人と言う立場で殺せば善である。
- とは言え人が人を殺すことは悪です。本来神のみが裁けることなのです。

人は周囲に何らかの影響を及ぼして生きています。人との関わりを避け、山奥に一人暮らしをしても自然との関わりを絶つ事は出来ません。葉菜を育てる過程で葉に付いた虫を殺せば、人間にとっても菜にとっても善かも知れませんが、殺された虫にとっては悪です。また、多くの人にとって悪となる行為も、一方ではその結果を善と考える人がいます。水害は山林や田畑を流し大きな被害をもたらしますが、一方では人に害をもたらす害虫などを流して収穫をもたらす事もあります。善必ず善でなく悪必ずしも悪ではない。大きな目で見れば善も悪も紙一重です。

⑨ 「道の大原」

国学者本田親徳の数少ない著書の一つで、聖師は本田親徳の影響を多く受けている。

第37巻第20章「仁志東」に

先生《長沢雄楯》の母堂に豊子といふ方があつて、余程靈感を得てみられた。豊子さまは喜楽《聖師》に向ひ、豊子『お前さまは丹波から来られたさうだが、本田さまが十年前に仰有つたのには、是から十年程先になつたら、丹波からコレコレの男が来るだらう、神の道は丹波から開けると仰有つたから、キツとお前さまのことだらう、これも時節が来たのだ。就ては、本田さまから預つて置いた鎮魂の玉や天然笛があるから、之を上げませう。これを以てドシドシと布教をしなされ』

と二つの神器を箆笥の引出しから出して喜楽に与へ、且神伝秘書の巻物まで渡してくれられた。翌朝早うから之を開いて見ると、実に何とも云へぬ嬉しい感じがした。自分の今迄の霊学上に関する疑問も、又一切の煩悶も拭ふが如く払拭されて了つた。

本田親徳（ほんだ ちかあつ、文政5年1月13日（1822年新2月4日） - 明治22年（1889年）4月9日）は明治時代の神道家。古代に存在したとされる帰神（人に神を降ろす法）の復元を図り、鎮魂帰神を中核とする本田霊学を確立した。その理論は出口王仁三郎が開いた大本などの神道系新宗教に影響を与えたとされる。

経歴

1822年1月13日、薩摩国加世田（現鹿児島県加世田市）の武士・本田主蔵の長男として生まれる。会沢正志斎に入門し、平田篤胤などの影響を受けながら国学を学ぶかわら、20代前半の時期に「狐憑き」の少女と出会ったことをきっかけとして神霊の研究を始める。その教義は30代半ばに体系化されたとされている。

その内容を大別すると、

- \* 神や霊を人に降ろす方法である「帰神法」
- \* 帰神を実現するための精神統一の修行法である「鎮魂法」
- \* 鎮魂で得た力の応用としての「禁厭」からなっていた。

また、神懸かりによるお告げであっても、それを鵜呑みにするのではなく、懸かった神霊の階級や種類やを判別する「審神」（さにわ）を重視した。【ウィキペディアより】

江戸時代後期には国学者の平田篤胤、幕末・明治の神道学者・本田親徳等が「鎮魂帰神法」を用いて磐笛使用法の伝承事例を再興させました。

「音霊」の霊力を借りて神霊を呼び迎える儀式に使用されたのが磐笛で、本田親徳によって『鎮魂帰神の作法に必要な用具たるべし』と示されています。

鎮魂帰神法は一種の降霊術とも言えるもので、秘教的な意味合いが強いものですが、現在ではその危険性から一部の神道系流派が行っているのみのようです。

鎮魂帰神法

- ①侍座者が石笛を吹いて神主（憑代）をトランス状態に導き、神霊を呼び迎えて神主に憑依させ
- ②審神者（さにわ）が神の正邪を見極め
- ③神主を介して神の託宣を受ける 【ヤポネシ屋（インターネット）より】

「善は天下公共のために処し、悪は一人の私有に所し、正心徳行は善なり。不正無行は悪なり」  
神がこの世をお創造りになったのは全てのものを等しく愛されるお気持ちからである。従って差別のある愛は悪となる。また、何もしないことは悪であると言うことに注目したい。大祓祝詞（神言）に天津罪の中の一つに開発を怠ることが含まれている。無為無策、怠けることは罪である。

⑩ 『人の身魂そのものは本来は神である。ゆゑに宇宙大に活動し得べき、天賦的本能を具備してをる』

全ての物は神の分霊であり、人は神に最も近い存在です。従って大本教旨にあるよう神人合一すれば大きな力を発揮できるのです。

人は郷土愛とか国家愛とか言うが世界愛を叫ぶ人はほとんど居ません。通信や交通機関の発達により世界がこれだけ狭くなったのだから青年の大志も世界を背負って働く様に意識改革をせねばなりません。こう言うと宇宙に飛び出せと早合点するかも知れないが、郷土や国を単位に考えるのではなく世界（地球）を一つの国と考え、全てのものに貢献する事を考えるべきです。いや青年ばかりではなく老人もいたずらに自己の老後を心配する前にこの世界の混濁した情勢を心配していただきたい。

⑪ 『智、愛、勇、親を開発し』

詳細は「基本宣伝歌」 18ページを参照

智、愛、勇、親は人の四魂である奇魂、幸魂、荒魂、和魂の働きである。人はこの働きを完全き物にしななければならない

⑫ 『分段生死の肉身』（六つの迷界に生まれかわり死にかわりする肉体）

六道（ろくどう、りくどう）とは、仏教において迷いあるものが輪廻《迷いの世界を生きかわり死にかわること》するという、六種類の迷いある世界のこと。

天道（天上道、天界道とも） 人間道 修羅道 畜生道 餓鬼道 地獄道 のこと。

天道： 天道は天人が住まう世界である。天人は人間よりも優れた存在とされ、寿命は非常に長く、また苦しみも人間道に比べてほとんどないとされる。また、空を飛ぶことができ享樂のうちに生涯を過ごすといわれる。しかしながら煩惱から解き放たれていない。天人が死を迎えるときは5つの変化が現れる。これを五衰（天人五衰）と称し、体が垢に塗れて悪臭を放ち、脇から汗が出て自分の居場所を好まなくなり、頭の上の花が萎む。

人間道： 人間道は人間が住む世界である。四苦八苦に悩まされる苦しみの大きい世界であるが、苦しみが続くばかりではなく楽しみもあるとされる。また、仏になりうるという救いもある。

修羅道： 修羅道は阿修羅の住まう世界である。修羅は終始戦い、争うとされる。苦しみや怒りが絶えないが地獄のような場所ではなく、苦しみは自らに帰結するところが大きい世界である。

畜生道： 畜生道は牛馬など畜生の世界である。ほとんど本能ばかりで生きており、使役されなされるがままという点からは自力で仏の教えを得ることの出来ない状態で救いの少ない世界とされる。

餓鬼道： 餓鬼道は餓鬼の世界である。餓鬼は腹が膨れた姿の鬼で、食べ物を口に入れようとすると火となってしまい餓えと渇きに悩まされる。他人を慮らなかつたために餓鬼になった例がある。旧暦7月15日の施餓鬼はこの餓鬼を救うために行われる。

地獄道： 地獄道は罪を償わ<sup>つぐな</sup>せるための世界である。詳細は地獄を参照のこと。 【ウィキペディアより】

⑬ 『成神観』

「不公平な現実社会から離れず、ことごとくこれを美化し、楽化し、天国浄土を眼前に実現させるのが成神観である」と説く。原本末尾の注には、「我々人間の生を位置づけ、カミにも成りうるとされる人間の「自我実現」についての考え方」とあります。

現実社会は罪悪に満ち足の踏み場もないほど汚れています。しかし、心の持ちようでは自分の周囲を浄化して行けます。神は三界を救う大野心家であり、今の人は自分の周囲だけに目を注ぐ自己本位な生き物です。人は神に最も近く、身魂は本来神であると説かれています。従って自分を研けば神になれるのです。

人は善悪両面の働きを持っています。その働きを自分の周囲にだけ気を配るのでなく、大げさに言えば宇宙全体に気を配るほどの意識が必要です。それには省勇親愛智の五情（一霊四魂）の働きを開発しなければなりません。

